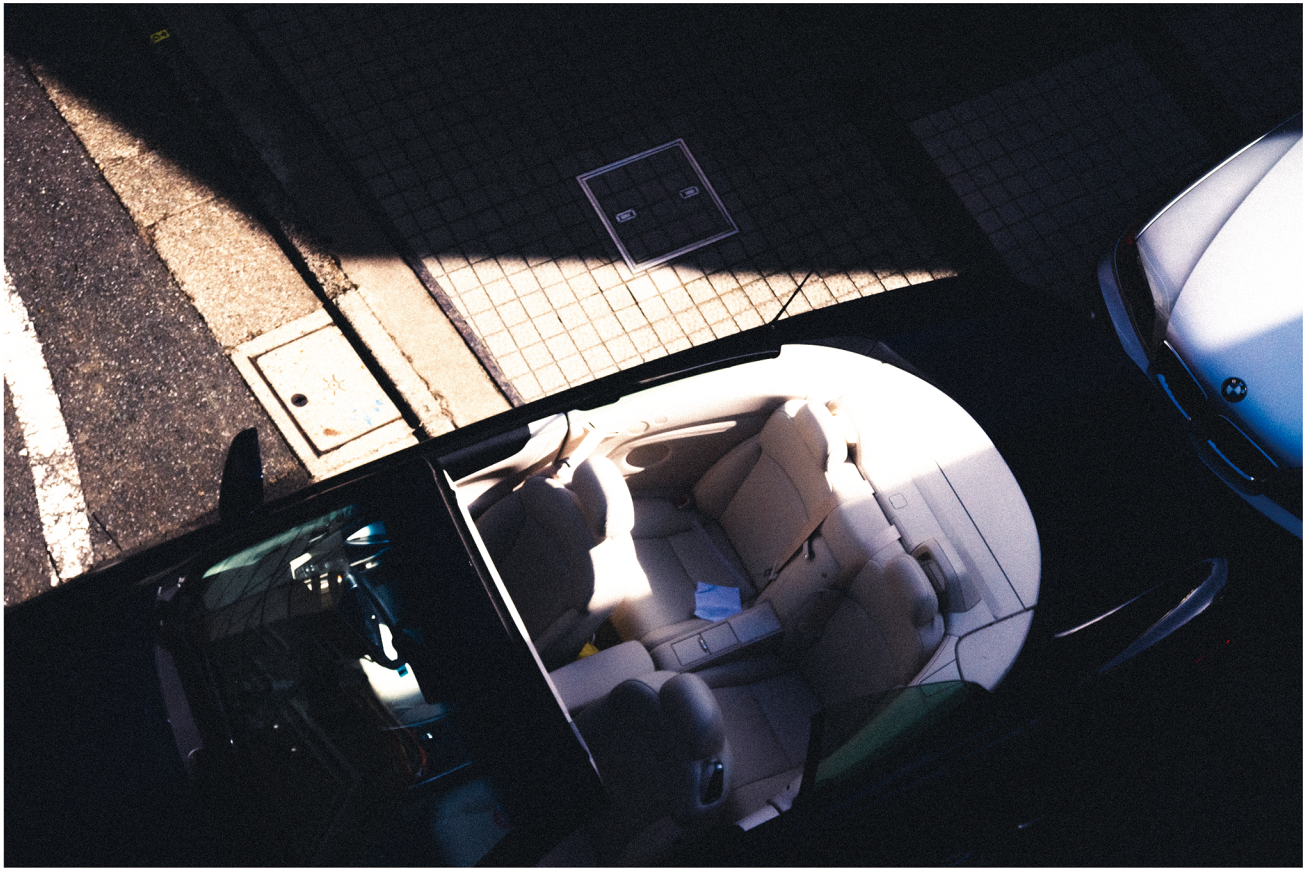
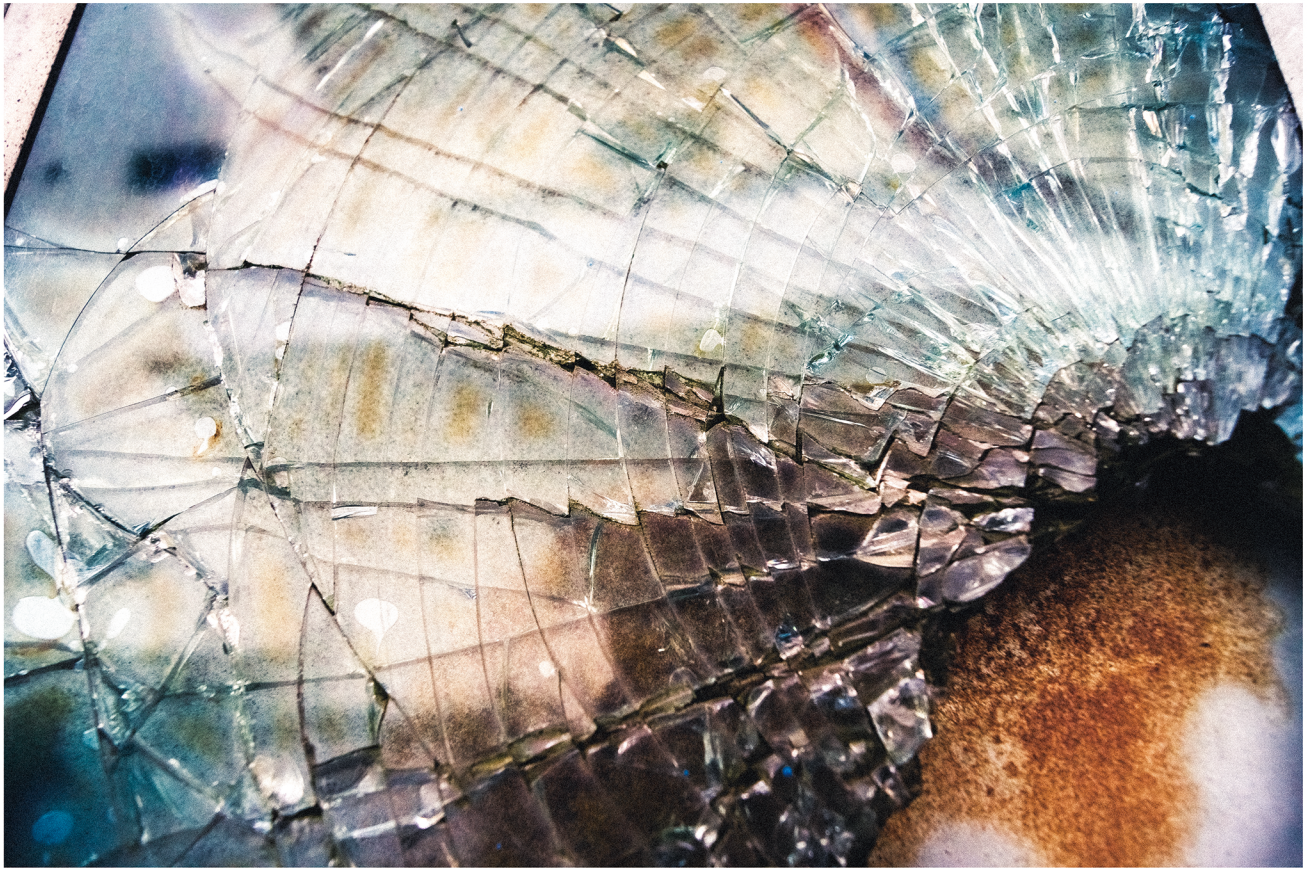
「隔世の泡」

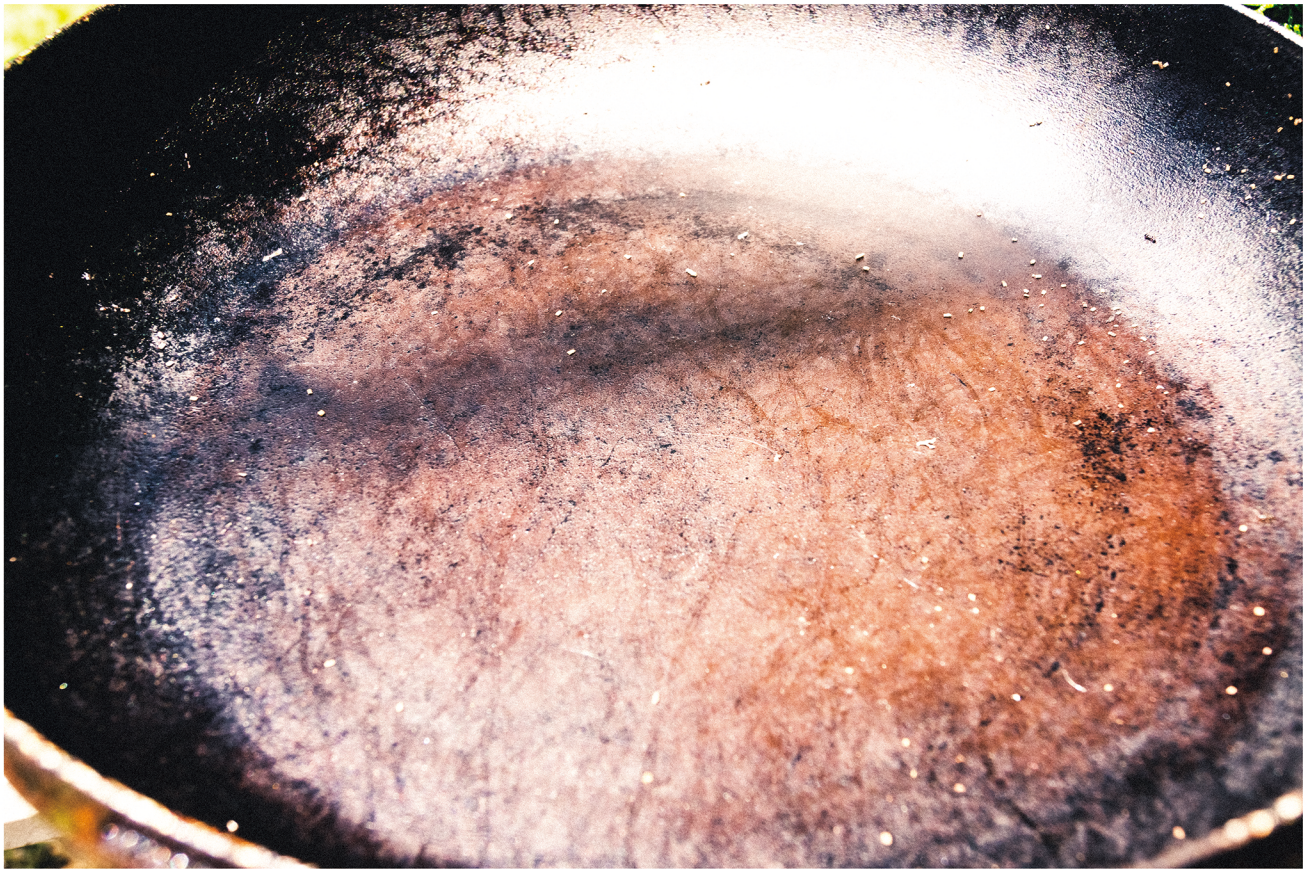
実家に置きっぱなしだった荷物から懐かしい鍵を見つけた。
もう10年以上前に使用していたモノで、どうやら合鍵を返却し忘れていたらしい。
その鍵は、ボロアパートの6畳1ルームと狭い部屋の物で、隣からはギターの音が聞こえ、反対はゴミ屋敷だった。
愉快な隣人に挟まれ、僕は2年間を写真学生として過ごした。
写真を勉強したという感覚は余りない。
ただただ、自分と向き合った2年間だった様に思う。
常に心が渦巻き、価値観が塗り変わる日々の中で、焦燥感を抱えて写真を撮っていた。

今となっては、解像度の無い遠い記憶。



LPG
横浜市





110
119
911
118
17

「途中下車」

暑い夏の日のこと。

「ここで降りよう」

唐突な一言とともに、腕を引かれながら、僕らは何もない無人駅に降りた。

どうやら川が気になったらしい。

そのほとりで足を冷やしながら、ふとした道草も悪くないと感じた瞬間だった。

「廃墟の猫」

近所の廃墟に、ひと際大きな猫がいた。

近づいても逃げることはなく、ただ触れようとすると威嚇する――

人懐っこさとは程遠い、不思議な佇まいだった。

何度か足を運ぶうちに、いつの間にかその姿は見えなくなった。

「猫っぽいな」とだけ、かすかな記憶が残る。

たぶん、人生で初めて猫に会うためだけに通った場所だった。

「夜明けまで」

暗い表情の友達が、あの夜ふと家を訪ねてきた。

彼女は、首吊りに失敗して病院に搬送されたから「家に帰るのが怖い」と呟いていた。大量の薬を服用し、ドアノブを使って首吊りを試みたが、友人に発見され失敗に終わったらしい。

どんな言葉をかければよいのか分からなかった。

たぶん「命は大切に」と、ありきたりな言葉だけを口にして、心の奥底に触れる様なことは聞かなった。

できなかった。

その後、ピザを頼み、どうでもいい話に花を咲かせながら夜明けまで過ごし、川沿いを散歩した。朝焼けは、今まで見た中で最も美しく見えた。強く洗練された都会の女性。

そんな勝手なイメージを持っていたが、彼女もまた僕と同じように寂しさを抱えていたのかもしれない。